

Program Notes

交響詩『ドン・ファン』 (R.シュトラウス)

R.シュトラウスは1864年、宮廷管弦楽団のホルン奏者の父と、有名なビール業者の娘である母との間に生まれました。4歳の時に父の仕事仲間からピアノの手ほどきを受け、その後作曲およびヴァイオリンに手を広げていきます。



Richard Georg Strauss (1864–1949)

少年期には家で父のホルン演奏の伴奏を行い、また父が指導していたアマチュア・オーケストラでヴァイオリンを演奏していました。作曲は、父が大のワーグナー嫌いだったこともあり、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトらを手本に勉強を行っています。

17歳で自作の交響曲の演奏・出版、20歳で指揮者デビューを果たし、1886年には初の交響詩「マクベス」を手掛けています。続けて「ドン・ファン」を1888年に作曲しましたが、「マクベス」はその後改訂を行ったため、「ドン・ファン」が先に世に出ることになりました。初演は1889年、彼自身の指揮で行われ、大成功を収めています。

総譜の冒頭に、オーストリアの詩人ニコラウス・レーナウの詩「ドン・ファン」からの抜粋が収められています。一般的なドン・ファン伝説は「次々と女をものにする好色家」というイメージが強いですが、レーナウの詩では「永遠なる理想の女性を求めて遂に果たすことができない英雄」として描き出されています。

曲は単一楽章ですが、大きく5つの場面に分けて解説します(解釈には諸説あります)。

冒頭～ドン・ファンのテーマ

冒頭、電光石火で一気に幅広い音程を駆け上がり、ドン・ファンの情熱を表す。ティンパニの4連打の後、木管楽器の3連符に乗ってヴァイオリンによりドン・ファンのテーマ(第1主題)が提示される。

最初の女性との出会い～破局

ヴァイオリンソロにより、気品のある女性が表現され、続いてクラリネットとホルンの主題をヴァイオリンが追いかけるようにして、恋人たちの対話が始まる。

盛り上がりを見せるが事態は切迫し、冒頭の動機が出て我に返る。

2人目の女性との出会い～終焉

ヴァイオラとチェロの主題により女性を誘いに出る。最初は拒否されるが(フルート)、やがて受け入れられ、オーボエとの息の長い甘美なやりとりが続く。しかし、やがてふと我に返り、静かに女性から離れる。

仮面舞踏会～破綻

ホルンのファンファーレのような第2主題を受けて、仮面舞踏会のような喧噪となる。グロッケンや弦楽器・木管楽器の跳ねるような下降音型の中、金管楽器により重厚な動機が出て、トランペットにより第2主題が繰り返される。しかしそれも徐々に雲行きが怪しくなり、破綻を迎えて静まり返る。

新たなる冒険～燃え尽き

新たなる冒険に向けて再出発し、ヴァイオリンにより第1主題が再登場する。ホルンとチェロにより第2主題が改めて出て、木管とヴァイオリンに引き継がれる。付点付きの3連音のうねりを伴って盛り上がり、第1主題が戻ってきて最高潮に達するが、突如虚無感に襲われ、下降(弦楽器)、倒れ(ファゴット)、最期の震え(ヴァイオラ)を経て、燃え尽きる。

(オーボエ 中原克明)

歌曲集 — 管弦楽伴奏版 — (F.シューベルト)

シューベルトは「ドイツ・リート(歌曲)」を様式的に確立させた作曲家で、その短い生涯の間に約600曲にもものぼる歌曲を作曲しました。詩の持つ意味内容や雰囲気音楽と深い関係にあることはもちろん、詩本来の韻律や発音の流れと音楽が自然に結びついています。

そしてこのドイツ・リートの系譜はシューマン、ブラームス、ヴォルフ、マーラー、R.シュトラウスへと受け継がれていきます。

本日演奏する歌曲はいずれもピアノ伴奏として作曲されたものですが、後の作曲家が管弦楽伴奏に編曲しています。どの編曲も、原曲の個性を大きく変化させず、表情や響きをより強調し深みを与えています。テノール・ソロの豊かな表現と管弦楽により新たな命を得た歌曲をどうぞお楽しみください。

ます
『鱒』

編曲: B. ブリテン
歌詞: C.F.D. シューベルト

シューベルトの作品の中でも最も有名な曲のひとつです。少女に世の中の怖さを暗喩する内容です。清流で生き生きと清らかに泳いでいる鱒を2本のクラリネットが表現します。釣り師が竿で水をかき回して濁らせ、ついに釣り上げてしまう様子が軽妙な曲想で歌われます。



Franz Peter Schubert (1797– 1828)

『彼女の肖像』 編曲:A.ヴェーベルン
歌詞:H.ハイネ

シューベルトの死後にまとめられた14曲からなる歌曲集「白鳥の歌」の第9曲です。ゆっくりしたテンポで抑制された静けさで歌われる曲です。

失った彼女の肖像画をひとり眺めながら在りし日を思い出していると、その肖像は命を受け、微笑みを浮かべ、ふたつの瞳に涙さえ光るように感じられますが、やがて幻と消えてしまいます。

『君はわが憩い』 編曲:A.ヴェーベルン
歌詞:F.リュッケルト

4つの連作歌曲Op.59の3曲目です。心の中の「君」に、叶うことのない永遠の救いを見る曲です。

穏やかな流れが全曲を貫いており、清澄で格調高い曲です。3節から成り、大きな感情の盛り上がりを見せ、再び安息的な気分に戻ります。

『涙の雨』 編曲:A.ヴェーベルン
歌詞:W.ミュラー

全20曲からなる歌曲集「美しき水車小屋の娘」の第10曲です。若い粉挽き職人が修行のためにさすらいの旅に出る詩に基づく、ひとりの若者の悲恋物語です。

前半10曲の恋の喜びから、後半の恋の痛手と悲しみ、絶望へと変わっていく転換点の曲です。

『魔王』 編曲:H.ベルリオーズ
歌詞:J.W.v.ゲーテ

シューベルトが18歳の時に作曲した曲です。中学の音楽教科書にも扱われ特に有名な作品です。

ゲーテは晩年に「曲全体が一幅の絵のよう」と高く評価し、最初に聞いた時に真価を見抜けなかったことを悔いたと言われています。

嵐の夜、馬を走らせて家路を急ぐ父と怯える息子、その息子を甘い言葉で誘惑する魔王を描く、ひとり芝居のバラードです。

疾走する馬を表す三連符の連続が印象的です。親子の対話と魔王の声は、それぞれ強弱や音色を変えて歌われます。

(フルート 庄子聡)

交響曲第8番ハ長調『ザ・グレート』 (F.シューベルト)

31年という短い生涯の中で、1000曲あまりの作曲をしたと言われるシューベルト。その作品には、未完であったりスケッチのみが残る曲も多い。本曲の楽譜も、シューベルトの死後、シューベルトの家を訪れたシューマンによって発見され、メンデルスゾーンが初演している。

本曲の『ザ・グレート』という副題についてであるが、偉大な誰かや何かをモチーフに書かれた、という訳ではない。本曲はハ長調であるが、既に書かれた交響曲第6番もハ長調であり、「大きいほうの(ハ長調交響曲)」という意味である。

ところで、この『ザ・グレート』は、アマチュア演奏家の中では(もしかしたら聴く側も!?)どうも好みが分かれる曲らしい。私は本曲が大変好みだが、「曲が長くて疲れる」「繰り返しが多くて単調」などという意見を聞くことも多い。そこで、今回は私なりの本曲の楽しみ方を書いておく。もしも退屈しそうであれば、この紹介文を演奏中にチラチラ見て、テーマ探しをしたり風景を思い浮かべながら曲を楽しんでいただけると幸いである。その際は、ページをめくるときは細心の注意を払い、くれぐれも演奏中に落としたりなどしないように…。

第一楽章

山々の向こうから太陽が昇るようなホルンの主題から、曲が始まる。

弦楽器の短い応答を経て、次に主題を奏するのは木管楽器。また弦楽器の応答を経て、ヴィオラとチェロによる美しい旋律が流れる。

その後、再びの主題。今度はトロンボーンと弦楽器に木管楽器が応える。

暫しの転調を経て、再度木管楽器の主題。今度はヴァイオリンの三連符の伴奏が付く。曲は音量と速度を上げ、快活な第一主題が現れる。

第一主題は弦楽器の付点のリズム(ターンタターンタ)に、木管楽器の三連符(タタタタタ)が応える。ハ長調の明るさが、気持ちの良い朝を表しているように感じる。さて今日は何をして過ごそうか。リズムカルに曲が進行し、三連符の連打の後に二連符と共に音量が下がると、オーボエとファゴットによる不安で怪しげな第二主題へと移行する。主題はすぐにフルートとクラリネットの手に渡る。楽器による音色の違いも聴きどころである。

第二主題は四分音符と三連符の混じった形であるが、最初の四分音符の三音を取り出した形(タンタンタン)が、曲の随所に現れる。第一主題の2つと合わせた、この3つのパーツが音の高さを変えながら随所に現れる。探しながら曲を聴いてみると、より楽しめるのではないだろうか。

第一楽章にも繰り返しがあがるが、2度目は是非とも別の聴き方をしていただきたい。1度目に管楽器が沢山聴こえたなら弦楽器に、高音が聴こえたなら低音に、旋律が聴こえたなら伴奏に、という具合に耳を傾けていただくと、より味わい深く感じるはずだ。

第二楽章

第二楽章は、第一部と第二部が繰り返し交互に演奏される。いわゆるA-B-A-B-Aの形。

第一部はイ短調。弦楽器の序奏の後、オーボエによってリズムカルだが物悲しい主題が提示される。その旋律は、胸に抱く理想と現実とのギャップに苦しむ独白のよう。

付点のリズムの掛け合いで曲は進行する。合間にクラリネットとオーボエのリレーの形で現れる長調の上行音階部分は、苦悩の挟間に見る東の間の夢か。三度の主題の後、第二部へ移行する。

セカンドヴァイオリンとファゴット、そしてコントラバスの下行音階から始まる第二部は、温かいへ長調。真っ暗な教会で、頭上のステンドグラスから一筋の光が射し、徐々に光で満たされていく様子を想起させる。

何度も出てくる優しい四分音符の二連打は、遠い昔に抱いた凍り付いた夢を溶かし出すかのよう。包容力に溢れた旋律が徐々に愁いを帯びて

行き、第一部へ。

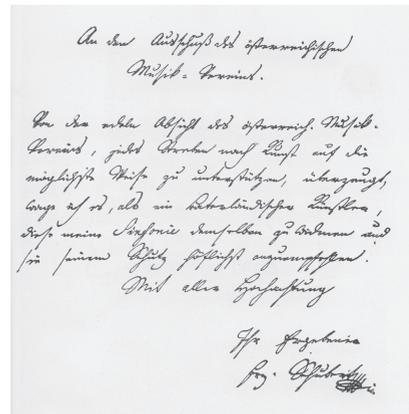
2度目の第一部。調性や旋律は1度目と同じだが、伴奏はより音が多く、凝ったものになっている。一度目との違いを楽しんでいただきたい。

後半に激しさを増した後、チェロの美しい間奏を経て、再び第二部へ。

2度目の第二部は、フルートとクラリネットの下行音階に、セカンドヴァイオリンとヴィオラが美しいオブリガートを添えて始まる。

1度目と変わり、気高いト長調の中にするせなさを感じる。救いを求めて何度も手を伸ばし、それでも届かないもどかしさを抱えたまま、第一部へ。

3度目の第一部、に入ったかと思えば、主題はすぐに四分音符の二連打に遮られる。



シューベルトが交響曲第8番『ザ・グレート』についてウィーン楽友協会へ宛てた手紙。交響曲は1826年に協会へ献呈されたが残念ながらシューベルトの生前に演奏されることはなかった。



短い生涯のほとんどをウィーンで過ごしたシューベルトだが、1825年の5月から9月の終わりまでグムデン、リンツ、ガスタインなどを旅行し、交響曲第8番『ザ・グレート』はこれらの風光明媚な土地で作曲された。(左:ザルツブルク州のガスタイン、右:オーバーエスターライヒ州のグムデン)

ここで何度も出てくる四分音符の二連打は、優しくなった第二部のそれとは違い、終焉を告げる天使のラッパのよう。曲は終わりに向けて徐々に沈んでいく。もがきながら懸命に手を伸ばすが、浮かび上がることはない。

第三楽章

第二楽章の悲しみを忘れさせる明るいスケルツォは、第一楽章と同じハ長調。例えるなら、活気あふれる昼の街中か。

冒頭から八分音符6つ(タカタカタカ)と四分音符3つ(タンタンタン)の特徴的なリズムから始まる。

この6+3の主題はもちろん、6だけ、3だけ連続で出てくる箇所も多い。

街中の人々があちらこちらでおしゃべりをしているかのように、色々なパートが様々なタイミングでこのリズムを演奏する。

後半のトリオは牧歌的なイ長調。

広々とした草原に青空が広がり、心地よい風が通り抜ける。穏やかで満ち足りた心に、ふと悲しい思い出がよぎる。交互に現れる長調と短調のコントラストが印象的。繰り返しを経てスケルツォに戻り、最後は明るく終わる。

第四楽章

第三楽章のハ長調の響きそのままに始まる冒頭は、号令かのように聴こえる。これを合図に音楽が走り出す。

第四楽章は、冒頭の「ターンタタン」と、それに応える「タタタタン」の二つのリズムで構成される。このリズムの上で、旋律が調性を変えながら展開していく。

本楽章だけで1155小節(ここにさらに繰り返し分が加わる)という、とてつもない道を猛スピードで駆け抜けていく。時に明るく、時に切なく、走り出した音楽はもう止まらない。

(ヴァイオリン 北頭弘)